光への扉

ami

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
光への扉

【Ｎコード】
Ｎ３８３９Ｉ

【作者名】
ａｍｉ

【あらすじ】
「ずるいよ。お姉ちゃんは」
そんな言葉に縛られる女子高生、梓。
なんでも笑ってそつなくこなす人気者の同級生、蓮。
２人が出会ったのは偶然？必然？
最初の方はシリアスですが、そこまで暗い雰囲気にはならない予定です。

第1章・プロローグ

もしも1つ。
たった1つだけ、神様が自分の望むものを与えてくれるなら、あなたは何を望む？

地位？
財産？
たくさんの友達？
かっこいい彼氏？

私は　――――――――――――。

「梓・・・おまえはこの先、どうするつもりなんだ」

久しぶりに声をかけられて、正直心臓が跳ねた。
思わず目を見開いて、声の主を見る。
その声の主・・・私のお父さんは、ソファーに座り、深刻そうな顔をして私の足元を見つめていた。
そんなお父さんの隣で、俯いて心ここにあらずといった様子のお母

さんも一緒に私の視界に入る。

ああ。

この人たちは、何時の間にこんなにやつれてしまったんだろう。

少し見ぬ間に、ずいぶんと小さくなってしまった。

昔はあんなに大きく感じたのに。

いや、私が大きくなったのかな。

「どう、って？」

「おまえは、いつまで自分勝手なことをしているつもりなんだ」

「どうしたの？突然」

今まで私のことなんて気にも留めなかったのに。

私が何をしたって、見てみぬ振りをしてきたくせに。

どうして今になって、そんなことを言うのか。

そんな思いが心に浮き上がり、苛立ちを覚える。

しかし、そんな思いも次の瞬間には、まるで最初からなかったかのように消え去った。

「・・・泉の余命は、あと・・・・1年なんだそうだ」

泉。

私の頭の中が真っ白になる。

お母さんの瞳から、ぽろりと涙がこぼれた。

しかし、それを拭う元気もないらしく、ただぽろぽろと涙を流している。

「おまえは・・・泉の分も、しっかりと、全うな人生を送る努力を

するべきだ」

お父さんはそう言って、私にＡ４サイズの茶封筒を手渡してきた。
私はそれを無意識のうちに受け取りつつも、しばらく動くことが出来なかった。

頭の中には、白い部屋で白いベッドの上に横になりつつも、私に優しく、穏やかな笑顔を向けてくれる、妹・・・泉の姿が鮮明に浮かんでいた。

もしも１つ。
たった１つだけ、神様が自分の望むものを与えてくれるなら、あなたは何を望む？

私は。

＞ｉ２３６１｜３８７＜

私は、自分の命と引き換えに、妹の命を救ってくれることを望みます。

第1章・プロローグ（後書き）

小説を書いていると、本当にプロの小説家さんの文章の表現力はすごいなぁと
感じます。
作者の文章力の無さにがっかりせず、このお話の主人公・梓がこれからどんな風に変わっていくかを見守っていただけたらなぁと思います。

第1章・1話

私立栄翔学園高等部。

あの日、お父さんに手渡された茶封筒の中には、そんな文字が大きく書かれたパンフレットが入っていた。
この地域に住む人間ならば、誰でも知っている名門高校。
有能な人間化、いい家柄の人間しか入学を許されない庶民の世界とは隔離された全寮制の学校。

そんな学校のパンフレットを私が現在手にしている私。
・・・なんかの間違いだよ、コレ。

私はパンフレットの表紙に視線を落としたまま、頭の中でそう呟いた。
表紙を飾る、広大な敷地に佇む立派な校舎。
つい先日、実際にこの目で見てきた。
・・・というのも、実は私、この栄翔学園高等部への入学が決まってしまったのだ。

敷地内には高等部以外にも幼稚舎・小等部・中等部・大学の校舎が入っているそうだ。
実際に見たわけではないが、あれだけ広い敷地だ。
幼稚舎から大学、すべての校舎が収まっているというのも納得できる。
驚くべきは、そこではないのだ。

一番の問題は、私が受かってしまったこと。

なぜ。
どうして。
そんな風に悩んだのは一瞬。
すぐに答えは出た。

私が『上島家』の人間だからだ。

上島家は、音楽業界の中でも有名だ。
父は有名な音楽大学を卒業したピアノの弾き手で、現在は大手楽器店の社長を勤めている。
私は父の仕事のことをあまり知らないけど、日本各地に数え切れないほどのチェーン店を展開しているらしい。
母はそんな父と同じ音楽の世界の人間で、有名なバイオリニスト。
祖父母まで音楽関係の人間。
つまり、上島家は音楽家の家系なのだ。

お金に困ることなんて無い。
何不自由なく暮らせるだけの・・・不自由ないどころか、むしろ贅沢し放題なくらいの財産を持った上島家。
お金持ちや優秀な人間のみが入学を許される栄翔学園にとっては、上島家の人間の入学を断る理由なんてないはず。

私が評価されたわけじゃない。
『上島』という名前が評価されたんだ。

そんな結論にあっさり至ってから、時間は流れに流れ。

「はぁ」

私は思わずため息をついた。

全身鏡に映し出された、真新しい制服に身を包んだ自分。
グレーのブレザーに白いワイシャツ。
スカートとリボンはおそろいのグリーンのチェック柄。
栄翔学園高等部の制服は、正直可愛い。
けれど、そんなことに浮かれられる気分ではなかった。

私は鏡に写る自分の姿から目をそらし、部屋を眺めた。
昨日から暮らし始めた、まだ見慣れぬ部屋。
これが、私の寮の部屋だ。
・・・といっても、とてもじゃないけどこれが寮の一室だなんてとても思えない。

広いリビング。
日当たりのよいベランダ。
ダイニングキッチン。
バスルームもトイレも予想以上に広い。
そして現在私がいるリビングとは別の私の寝室。

「・・・これって、寮っていうより、高級マンションの一室・・・だよね」

正直、学生1人が使うにはあまりにも広くて豪華すぎる。
そう考えてしまうのは、栄翔学園の生徒としてどうなのか。
絶対にこれから入学する私と同じ栄翔学園の1年生達は、なんの違和感も無くこの空間の広さに慣れているだろう。
というか、私は生まれる家を間違ったとしか思えない。
16年近く、お金持ちの家の人間として生きてきたはずなのに、自分の家の広さにも「広すぎる」と感じてしまったりすることがあったくらいだ。

絶対に庶民に生まれる予定の人間だったとしか思えない。
時計をちらりとみると、もうそろそろ出なければいけない時間になっていた。

・・・正直逃げ出したい気持ちでいっぱいだけど。
というか、逃げ出してしまおうか。
お父さんとお母さんには申し訳ないけれど。

私に上島家の名前は重過ぎる。
絶対に泥を塗ってしまう。

怒られるのには慣れてるし、今更優等生ぶって期待されるようなことになったら・・・なーんていうことは絶対にありえないとは思うんだけど、もしそんな事態に万が一なってしまうよりは、怒られたほうが全然マシな気がする。

そんなことを考えながら、とりあえず私は靴を履く。
サボるにしたって、この広い部屋に1日中1人でいるというのも、どうも落ち着かないし。
鞄を肩にかけ直し、私はドアを開けた。

「おはよ。上島さん♪」

しかし、私は再びドアを閉めることになる。
私は頭をぶるぶる振った。
そして、もう一度ドアを開ける。

「なんでドア閉めるの？」
「・・・・・・・・・スイマセン。どちら様でしょうか」

ドアの前に立っていたのは栄翔学園高等部の制服を着た男子だった。
栄翔学園の人間だから育ちはいいはずなのだが、目の前にいる男子は制服を若干着崩していた。
しかし見苦しくは無く、むしろなんだかお洒落な雰囲気を醸し出している。
髪色もきっと染めたんじゃないかと思われる色素の薄さで、耳にはピアスまでしている。

私の言葉に綺麗な顔に綺麗な笑顔を浮かべた。

「俺は菅野蓮（すがのれん）。上島さんのこと、迎えにきたんだ」
「・・・あの・・・だから、どちら様でしょうか」
「だから、菅野蓮だよ」
「・・・・・・・・・」

にこにこにこにこ。
びくとも動かない笑顔に、私はまたもやドアを閉めたくなる。

誰？
どこの菅野サン？
私の知り合いの中に、そんな名前の人間がいた記憶なんてまったくない。
ましてや、栄翔学園に通う生徒の中になんて。

「俺の事知らないでしょ？たぶん、俺が一方的に上島さんのこと知ってるだけ」
「はあ・・・えっと、それでなぜ私を迎えに？」
「ぜひお友達になりたいと思って♪」
「ごめんなさい。私ちょっと急いで学校に行かなきゃいけないので」

この人すっごく怪しい。
顔はかっこいいけど、ものすっっっごく怪しい。
だいたい、どうして私が話したこともない初対面の人と一緒に学校に行かなくちゃ行けないんだ。
というか、一方的に私のこと知ってるって、一体どこで私のことを知ったっていうの。

「急ぐなら俺も合わせるよ？」
「いえ、申し訳ないんで」
「俺が一緒に行きたいんだから、別段申し訳なく思うことなんてないよ」

しつこい！
私は少しイラッとして、ずばっと言い放った。

「私、友達作る気全くないんで！」
「え、俺の事キライ？」

キライもなにも、初対面ですよ。

「・・・とにかく、あなたじゃなくても、友達を作る気はこれっぽっちもないですから」

私は話していても埒があかないと判断して、部屋の外に出てドアの鍵を閉めると、「それじゃあ」と一言別れの言葉を口にして早足で歩き出した。

上島梓、１５歳。
今年の誕生日で１６歳。
私は今日から、上島家のお嬢様として、名門・私立栄翔学園高等部に入学する。

仲のいい友達。
かっこいい彼氏。
作る気なんて全くない。

楽しい青春を送ろうなんていう気はこれっぽっちもないんだ。

第1章・2話

結局、入学式にでないのはまずいだろうという考えに至り、私は逃走するのをやめた。
周りの印象などそれほど気にしたことは無いが、さすがに初っ端から無断欠席は目立ちすぎる。
この高校では問題を起こさないようにと、お父さんにきつく言われているし。

「はぁ・・・」

まだ起きてから2時間ほどしか経っていないというのに、一体私は何回溜め息をついただろう。
溜め息をつくと幸せが逃げるというけど、きっと私は今日1日だけで、人生の3分の1ほどの幸せを逃がしてしまったと思う。

だからなのか。

「何溜め息ついてんの？上島さん？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

人生ってほんとに上手くいかない。
どうして。
なんで。

「いやー、まさか同じクラスで、しかも隣同士の席！もうこれ、運命じゃない？」

そんな運命あってたまるか！！

私は心の中でそう叫ぶ。

人の目もお父さんの目も気にせず、サボってしまえばよかった。
いや、サボったって次の日にはこの男・・・朝私の部屋の前で待ち構えていたこの男は、また馴れ馴れしく「あ、昨日どうしたの？っていうか俺達同じクラスで隣同士の席だよ♪」なんて笑顔で話しかけてきそうだ。

「あの。すいませんが」
「あ、敬語じゃなくていいよ。だって俺達同じ年だし」
「・・・じゃあ敬語はやめてはっきり言うけど、私には声をかけな・・・」
「あ！そういえば俺達寮の部屋も隣同士なんだよ」
「え！？寮も！？」

私は驚きの声を心の中に留めることができなかった。
そんな私に、ヤツはにっこり微笑む。

「もうコレは完璧運命だね。付き合う？」

同じクラス。
隣同士の席。
隣同士の部屋の寮。

どこまで私はついてないんだ。
というか、この学校のシステムがそもそもおかしい。
どうして学校の寮が男女混合なの。
普通は男女別に寮を用意するでしょ。
そうすれば私とこの男は出会わなくてすんだはずなのに。

「ねえ、聞いてる？」

システムなんだから私個人がどうこう言ったってどうにもならない。もうシステムのことについてとやかく考えるのはやめよう。

「・・・どうして私の部屋の前で私を待ち伏せてたの」

そう。

一番の問題はそこだ。

システムやらなんやらという話は別として、この人が私と最初から関わろうとしていた限り、この事態は避けられなかったこと。

この人はは私を知ってたみたいだった。

でもどこで？

いつ、私を知ったの。

「俺の話はスルー？・・・まぁいっか。どうして待ち伏せてたかっていうと、それは上島さんとお話してみたかったからだよ。病院でちらりと姿を見たときから」

「病院って」

「誰かのお見舞いに通ってるだろ？市立病院に」

病院、という言葉に、私の頭に白い部屋が浮かび上がる。

白い、四角い部屋。

窓の外には青い空。

それを見つめる、白いベッドに横たわる・・・私の妹。

「俺の母さんもその病院に入院しててさ。上島さんがお見舞いに通ってる人の病室と俺の母さんの病室って近いんだ」

「・・・お母さん、病気なの？」

「まぁね。でも俺が小学校のころからだから、病院生活にも慣れち

ゃったみたいだけど。・・・あ！そうだ！今度一緒にお見舞い行く？」
「遠慮します」
私は即答した。
この人のお母さんは、あまり重くない病気なんだろうか。
だから、こんなに軽々しく病気の事を話せるの？
心配じゃ、ないの？
「あーあ。フラれちゃった。なんか寂しい」
本当に寂しそうに、しゅんっとして見せる。
わ、私が悪いの？
私が傷つけたの？？
「やーん。蓮がしょんぼりしてるー」
「どうしたのぉ？」
次の瞬間、女子がぞろぞろと集まってきた。
私は席ごと追いやられ、あっという間に１０人近くの女子が男の周りに終結した。
あまりの展開に、私は呆然と突如出来上がった壁・・・いくつもの女子の背中を見つめた。
「蓮、大丈夫？」
「うん、だいじょーぶ。ありがとう。アイちゃん、ミエちゃん、サチちゃん、アカリちゃん、ミオちゃん、ケイちゃん、ヨウコちゃん、リサちゃん、エリカちゃん、リエちゃん」
「「「「「「どういたしまして～？」」」」」」

い、異次元。
なんなの、これ。
というか、コイツもなんで全員の女の子の名前覚えてるの。
・・・もしかして、ものすごく女タラシ？

とりあえずＳＨＲぎりぎりまで別の場所に避難していようと、私はそそくさとその場から離れた。
なんだか急激にこの先の学校生活が不安になってきた。
初っ端からあんな男に目を付けられるなんて・・・これからどう対処していけばいいんだろう。
不安すぎて、だんだん胃が痛くなってきた。

「見ない顔だな」

私が教室の外に出たとき、ふとそんな声が聞こえた。
私に向けられたものかどうかはわからなかったが、俯けた顔を上げてみると、廊下の窓際に立ってこちらを静かに見つめる視線とぶつかった。

そこに立っていたのは、胸より少し舌まであるストレートな黒髪。
少し猫っぽさのある切れ長だが小さくはない目。
スカートから伸びる足はすらっとしていて、私より断然長い。

「え・・・・っと・・・・」

さっきのは、私に向けられた言葉だったんだろうか。

「突然すぎたな。悪かった。私の名前は神崎詩織（かんざきしおり）という」

やはり、私の方を真っ直ぐ見て言葉を発している。
それにしても、なんだか男の子のような喋り方をしている。
しかし、美人な人だから、そんな変わった喋り方も気にならない。

「おまえの名前は？」
「えっと・・・上島梓、です」
「梓か。いい名前だな。おまえも教室内の騒ぎが収まるまでここにいるといい。菅野蓮の席の近くになった不運な者同士、もしかしたら話が合うかもしれない」

そう言って静かに微笑む姿は、男子だけではなく、同性までも魅了してしまいそうな魅力があった。
私も例に漏れず、思わず見惚れてしまった。
けれども、生憎私は誰とも仲良くするつもりはないのだ。

「・・・すいません。私これから、ちょっと用事があるので」
「そうか。ならば仕方が無いな」
「ごめんなさい。それじゃあ」

よかった。
アイツみたいにしつこい人じゃなくて。

私はその場から駆け足で離れる。
しばらく駆け足で走っていたが、人が少なくなってくるに連れて、私はスピードを落す。
完全に立ち止まったとき、私の心を支配したのは、例えようのない孤独感だった。

『お姉ちゃん』

儚げに微笑む、私と瓜二つの女の子。
私の、片割れ。

『ずっと一緒だよ。お姉ちゃん』

ダカラ、ウラギラナイデ。

「・・・・・・うん。わかってるよ。泉」

私はその場にしゃがみ込んで、そう小さく呟いた。

第1章・3話

ＳＨＲが始まるギリギリ前に、私は再び教室に戻ってきた。
すぐには教室に入らず、ドアのところから教室の中を窺う。
私が教室を出る前まで女子に囲まれていたヤツの周りからは、女子達は消え、今は1人で私の右隣である自分の席に座っていた。

女子だけじゃなくて、いっそのことヤツも一緒にまるごと消えてしまえばよかったのに。
そんな性格の悪いことを考えつつ、私は教室の中に足を踏み入れた。

「おかえり♪」

私の存在に気付いたヤツは、にっこりと微笑んで手を振ってくる。

「・・・ただいま」
「不機嫌？」
「別に不機嫌じゃないよ」

不機嫌ですけどね。
だって、友達作る気ないって言ってるのにしつこいんだもん。

「不機嫌になるのも仕方が無いことだ。菅野蓮の周りはいつも騒がしい。静かに過ごしたい人間にとっては迷惑なことこの上ないからな」

私が自分の席に腰を下ろしたとき、私の後ろから声が飛んできた。
びっくりして、私は完全に自分のお尻がイスにくっつく前に後ろを振り返った。

「なんだよー。神崎は俺が迷惑だって言いたいのかよ」
「ああ。迷惑だ」

私の後ろに座っていたのは、私が教室を出るときに出くわした、あの美少女だった。
ポーカーフェイスを崩さず、相手が傷つくことなんかまったく気にしない様子で、さらりと酷い言葉を口にする。
というか、もしかしてあなたも私の平和な学校生活を脅かす存在？

「ヒドイと思わねー？上島さん」
「酷いも何も、事実を述べたまでだ。そちらこそ、こちらに迷惑をかけないように気を使って欲しいものだ。なぁ、上島梓」
「俺がいつ、どう迷惑をかけたんだよ。俺の周りの人間関係にとやかく口を挟むなよな。なぁ、上島さん？」

私にいちいち同意を求めてこないで！！
私は拳を机の下で、ふるふると振るわせる。

逃げたい。
逃げたい、逃げたい、逃げたい、逃げたい、逃げたい！！

どうしてこの2人が私の隣と後ろの席なのか。
自分の運の無さに泣きたくなってくる。
今まで決して人に褒められたような人生は送ってこなかったけど、
でも、こんな一気に私の運を奪い取ること無いんじゃないの！？
段々苛立ちが募る。

ガラッ。

私の中のイライラメーターがぐんぐん上がっていく中で、教室にある2つあるドアのうちの、教室の前の方のドアが開けられた。
ドアの向こうから、スーツ姿の女性が中に入ってきた。

コツ、コツ、コツ、と靴を鳴らして、教卓の前に立つ。
結構若い先生だ。
見るからに出来る女、といった感じで、スーツがよく似合うというのが第一印象。
スタイルがいいだけでなく、美人。
今日のうちに一体どれだけ綺麗な顔立ちの人を見ただろうと、自分の右隣の席の男子と自分の席の後ろの女子を頭の中で思い浮かべる。
顔もよくてお金持ちだなんて、『神様は二物を与えない』なんて言葉は絶対に嘘だ。

「初めまして。私は今日からこの栄翔学園高等部1年A組の担任を務めることになりました。押野奈央（おしのなお）といいます。担当教科は国語です」

私がそんなことを考えているうちに、先生は自己紹介をし、にっこりと微笑む。
少しきつそうなイメージだったが、微笑む姿はとても穏やかで優しそうだ。

「9時から入学式が始まりますが、時間までまだ20分ほどあります。中学からの持ち上がりで顔も名前も知っているという人が多いでしょうが、自己紹介を1人ずつ簡単にしてもらいたいと思います。名前・趣味は絶対言うようにしてくださいね。その他に言いたいことがあれば自由に付け足してくれて構わないから」

自己紹介・・・そういうの苦手。

私は思わず顔を顰めてしまう。
しかし、みんなは違うのか、先生に指名された1番最初の生徒は、まったく嫌がる様子もなくすっと席から立った。

「安堂恵です。知っている方も多くいらっしゃるでしょうが、私の父は安堂企業の社長を勤めています。多趣味なほうですが、主に華道、茶道、乗馬、テニス、ピアノが好きかしら。同じ趣味を持つ方やお友達になりたいという方は是非声をかけてください。1年間よろしくお願いします」

正直、何言ってるんだこの子、と思った。
自己紹介は自己紹介なんだけど、なんだか自慢話のようにしか聞こえない。
第一、父親の仕事なんて聞いてないし、わざわざ紹介することでもない気がする。

しかし、この安堂さんとやらから始まり、次々と自己紹介をする生徒達は自分の親の仕事を紹介したり、自分の家柄がどんなものかというのを話し出した。
もはや自己紹介と言うより一方的な自慢話だ。

別段お金持ちが悪いと思っているわけじゃない。
だって、私も一応結構いい家柄に生まれた人間だ。
でも、一度だってお金を持っているから偉いだなんて思ったことはない。
家柄やお金を持っているということは、自慢するようなことじゃないと思う。

「次の人は・・・上島さん、かしら？」

自慢話が続き、正直うんざりして自分の世界へと飛び立っていた私は、名前を呼ばれたことで現実世界に引っ張り戻される。
はっとして、私は周りを見た。
すると、教室内にいる生徒の視線が私に集まっていた。
全然自分に順番が回ってきたなんて気付かなかった。
慌てて席を立つ。

「私の名前は、上島梓です」

私が名前を言った瞬間、それまで穏やかだった教室内が一気にざわついた。
そのざわつきにほんの一瞬びっくりしたが、一気に冷静さが戻ってくる。
そのざわつきの原因が一体何なのか、すぐにわかったから。

――――――――――――　上島って、あの双子の？

小さな声が私の耳に届く。

――――――――――――　なんで栄翔にいるの？中学ここじゃなかったじゃない。

――――――――――――　上島の双子の噂っていったら・・・

「趣味は特にないです。1年間どうぞよろしくお願いします」

周りから聞こえてくるひそひそ声を最後まで聞かず、私は自己紹介を終えた。
どんなことが話されるかわかっているから、最後まで聞く必要はない。
私が再び席に座るときには、教室内はしーんと静まり返っていた。

かなり空気が悪い。

そんな中、突然その場の空気に合わない明るい緊張感の無い声が響いた。

「あ、次俺か！俺の名前は菅野蓮。趣味はひ・み・つ。どーぞよろしくね♪」

「秘密ってー？」

「教えてー！」

一気に空気が再び穏やかさを取り戻した。

正直、すごいと思った。

こんな一瞬で。

たった一言、二言の自己紹介で、この人は沢山の人の心を動かす。

「上島さんには教えちゃおっかな♪」

いつの間にか席に再び腰を下ろして、私の方に綺麗な笑顔を向けつつそんなことを言うヤツと目が合った。

「・・・別に知りたくないデス」

「素直じゃないなぁ」

本来であれば、私とこの人は関わることの無い人種。

私とは性質がかけ離れすぎているから。

どうせこの人も私の噂話を聞けば離れていくだろう。
この空間で最も異質な私を、誰が好き好んで受け入れるっていうの？
そんな考えが心の中に浮かび、私は静かに息をついた。

第1章・4話

ちゃらんぽらんしている。
常にへらへら笑っている。
しつこい。

ヤツへの印象など、こんな程度のものだった。

『雲ひとつなく晴れたこの日に、この栄翔学園高等部に入学できたことを、僕達新入生はとても幸せに思っています。これから始まる学校生活の1日1日を大切に過ごして、悔いのない青春を送りたいと思います』

訂正しよう。
ちゃらんぽらんしていて、常にへらへら笑っていて、しつこいけど、頭がいい。

今現在、ヤツ・・・菅野蓮は、体育館のステージに上がり、マイクを通して緊張した様子を欠片も見せず、すらすらと挨拶の言葉を口にしている。
どうやら、ヤツは新入生代表に選ばれるほどの頭脳の持ち主だったようだ。
失礼だけど、意外すぎる。
だって、ヤツのどこを見たって、頭がいいなんていう印象を持つことはできなかったから。

『わからないことばっかりで困ってしまうこともあるだろうけど、そういう時には先輩方に優しく助けていただけたらと思います』
「きゃぁぁぁぁぁぁぁ！」

「素敵！」
「蓮くーん！」

最後の一言に、オプションでキラキラ輝く笑顔。
女子達から黄色い歓声が飛んだ。
私は思わずその声に顔を顰めてしまう。
こうやって女子達の心を掴むヤツは策士なのか、それとも天然なのか・・・。
頭がいいから、策士なのではないかというのが私の予想だけど。

そんなことを冷静に考えてみたりする。
ヤツのことなんてどうして考えているのかと自分で自分にうんざりしてしまうが、そうでもしないと居心地が悪くて悪くてどうしようもなかった。

ヤツへ送られる歓声の中に混じる、ひそひそと交わされる会話。
いっそ耳を塞いでしまいたくなるが、ひそひそと私に聞こえないように話している―（実際は全部聞こえちゃってるんだけど）ということは、私への直接的な敵意は今のところ無いということだ。
それなのに、私が耳を塞いで聞こえていることが悟られてしまえば、相手も嫌な気分になってしまう。

―――――――――――――　本当に、あの上島の双子の片方なの？上島梓って。
―――――――――――――　さぁ。でもいろんな噂聞いてきたけど、ちょっと見た目のイメージと噂一致しないよね。
―――――――――――――　そうそう。もっと派手だと思ってた。だってさぁ、上島梓って・・・。

私は頑張って意識をステージ上に向ける。

他の何かに意識を集中させないと、嫌なことばかりが耳に入ってくる。

「ねぇ、見てくれた？俺の晴れ姿」

突然斜め前から声を賭けられて、私は顔をそちらに向けた。
そこには、いつのまにかステージ上から自分の席に戻ってきていたヤツがいた。
ヤツは寮の部屋、教室での席が近いだけじゃなく、名前順に男女別で並んでも私と位置が斜め前後という近さだった。

「俺ってこんなだけど、結構頭いいんだよ。おまけにスポーツも結構できるし。今なら上島さん限定でタダだよ♪」
「代表の挨拶お疲れ様。さあ、前をしっかり向いて入学式に参加しましょう」

私の言葉に、「本気なのにー」と本気だというのが欠片も感じられない木の抜けた言葉を返し、前を向いた。
その後姿を、私は少しの間静かに見つめた。

この男は、本当に何も知らないんだろうか。
いや、何も知らないからこうやって私と関われるんだろうけど。
でも、ここまで目立っていて、友好関係も広そうなのに私の噂を１つも知らないなんてことありえないと思う。

私の視線に気がついたのか、ヤツは私の方にもう一度顔を向けてきた。
そして、柔らかくにっこり微笑む。

一体、この男・・・何が目的なんだ。

「正直なところ、俺の事ちょっとは見直したでしょ？」
「菅野はそんなちゃらんぽらんな見た目をしているくせに、頭と運動神経だけはいい。全く納得がいかない。なぁ、上島」
「ちゃらんぽらんって言いすぎだろ！っていうか、俺のどこらへんがちゃらんぽらんなんだよ？自分で言うのもなんだけど、普通にイケてんじゃん。ね？上島？」
「・・・すいませんが、なんで2人はわざわざ私を間に挟んで言い争いを・・・という以前に、なんでそんな当たり前みたいな感じで3人揃って下校してるのかな？」

疑問に思わずにはいられない。
だって、私はあれから入学式を終えて、教室に戻って、ＳＨＲに出て、帰りの挨拶をした後に荷物を持って1人で教室を出たはずなんだから。
なのに、玄関で上靴から外靴に履き替えて、外に出た瞬間には何故か両サイドに2人がぴったりと。

「だって、俺ら部屋隣同士じゃん。これが自然の流れでしょ」
「そういうこともないと思うんだけど・・・」
「そうだぞ。菅野。部屋が隣同士だからといって、一緒に帰るというのとはイコールにはならない。ストーカー紛いなことは今すぐに

やめるんだ」
「それ言うなら神崎もだろー」
もう勘弁してください。
大きな溜め息を吐きそうになるのを必死に耐える。
正直、ここのところまで全て予定外だ。
本当ならば、登校初日ですでに教室で孤立してしまっている予定なのに、どうしてこんなお節介でしつこい人間が2人もくっついちゃってるんだ。
「あのー・・・」
「「？」」
それまで言い合いをしていた2人が、同時に言葉を切り、私の方に視線を向けてくる。
向けられる綺麗な顔と真っ直ぐな視線に若干怯みつつ、私は言葉を続ける。
「・・・あのですね、なんで2人は私に絡むんでしょうか。別段、こんな風に3人揃って帰るほど今日1日で親しくなった記憶はないんですけど」
「出会った時間は関係ない。内容が大事なんだよ。こういうのは」
いや、時間だけではなくて内容もそれほどなかったと思うんですけど。
「たまには良いことを言うな。菅野。・・・私はな、上島に運命を感じたのだ。きっと上島とならば上手くやっていける。親友になれるとな」

どんな場面で運命を感じたんでしょうか。
私は全然何も感じなかったんですけど。

「な、なるほど～」

全然納得してないけど、とりあえずそう相槌を打って、私は頭の中で目まぐるしく計画を練る。

この2人は強敵だ。
今まで私が接したことの無いタイプの人間。
人に好かれるために一生懸命になる人はいるだろうが、人に嫌われるためにこんなに頑張ってる人間なんてこの世の中で私だけなんじゃないだろうか。

「・・・あのね、私菅野くんには言ったかもしれないんだけど」
「あ、蓮でいいよ！っていうか、俺も『上島さん』じゃなくて、名前で呼んでいい？ってか、『アズ』って呼んでいい？」
「ずるいぞ菅野。ならば私も梓と呼ぼう」
「あのね！！」

まったく人の話を聞く態度のなっていない2人に、私は少し強めに声を出す。
すると、2人が「なんだ？」という感じでこちらに顔を向けてきた。

もうやってられない。
こういう人たちには、ずばっと直球で言ったほうがいいのかも。

「菅野くんには朝言ったかもしれないんだけど、私友達作る気0だから」

「そんなこと言ってたっけ？」
「言った！」
「梓にはなくても、私にはある。だから気にしない」
「神崎ー。友達って言うのはお互いが友達だとお互いを認知した瞬間から友達なんだよ。片想いのままじゃ友達にはなれないんだ」
「ならばおまえもだろう」
「俺は彼氏志望だもーん♪」

かっちーん。

「私はっ、あなたたちとはっ、この先の学校生活の中で仲良くする気はこれっぽっちもありません！！」

言ってやった！！

私の言葉を受けて呆然としている2人を置いて、私は学校の門へと早足で向かった。
後ろから追ってくる気配は無い。
学校の門を潜ったところで、私は歩くスピードを緩めた。

これで明日から、あの2人は私に関わってこようとはしなくなるだろう。
また、明日から何も無い、淡々とした日々が戻ってくる。
よかった。

そう。
これで、よかったんだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3839i/

光への扉

2010年10月22日00時42分発行